

存在論か、それとも生の哲学か

——ゲオルク・ミッシュのハイデッガー批判——

的 場 哲 朗

はじめに

論争が突然終結する——。そんなことは、哲学の論争においてはけっしてめずらしいことではないかも知れない。われわれがここでテーマとする論争、すなわちゲオルク・ミッシュとハイデッガーとの論争もそうした事例のひとつである。簡単に、〈存在論と解釈学の論争〉と呼んでもいい。

発端はハイデッガー『存在と時間』にあった。

ハイデッガーはこの書で、デイルタイの生の哲学を真正面からとりあげ、そもそもデイルタイの生の哲学の課題は、『存在と時間』において彼自身が提唱する「現存在の存在の理解への傾向」(1)にあったと位置づけたのである。そして、このかぎりにおいて、ハイデッガーの現存在の分析論こそデイルタイ哲学の真正な継承者である、と断言したのである(2)。

もちろん、これだけの主張ならとりたてて論争の火種となるはずはない。いうなればそれは、デイルタイ哲学の継承のひとつを宣言したにすぎないからである。しかしハイデッガーは、デイルタイ理解の方向性までもはっきりと提案したのである。彼は次のように述べる。

「根本において、以下の分析の唯一の問題は、今日の世代にとってようやく迫ってきた、デイルタイの研究を摂取同化することを、その分析の範囲内で、道を拓きながら促進することである」(3)。

あるいは、

「現存在の準備的な実存論的—時間性的分析論は、デイルタイの仕事に貢献するために、ヨルク伯の精神を育成しようと決意している」(4)。

こうした、ハイデッガーの力強い主張——いやむしろ、“意志”とでも形容したほうが適切かもしれないが——は当然ながら当時のデイルタイ学派のひとびとに大きな衝撃を与えることになる。

そのひとり、ゲッティンゲンのゲオルク・ミッシュ (1878-1965) ——デイルタイの娘婿——は、「この本『存在と時間』の好評ぶりはさしずめ電光の如くだった」(5)と形容し、これによって「哲学の舵は一挙に新しい方向にとられることになった」(6)と評している。この文書は、当時のドイツ哲学界全体の衝撃ぶりを言い表してもあまりあるものであるが、それ以上に、デイルタイ哲学の継承者ミッシュ自身 (デイルタイ著作集の編集者でもある) の狼狽ぶりも正直に吐露している。ミッシュは次のように述べているのだ。

「ハイデッガーが哲学運動に介入したことによって生れてきた状況は原理的な対決を [わたしに] 迫ったのみならず、同時に、デイルタイの [哲学の] 方向をもっと明瞭に打ち出す必要も高まったのである」(7)。

察するに、フッサールの現象学——いうまでもなく、『存在と時間』は彼の現象学的方法を用いている——のただ中から、デイルタイの生の哲学の真の継承を主張する哲学が出現したのである。しかも、そのハイデッガーはデイルタイ研究の道を拓く時まで宣言し、そこに「ヨルク伯の精神」まで持ち出したのだ。デイルタイ学派の重鎮・ミッシュの衝撃・狼狽は想像するにあまりある、と言えよう。

もちろん、こうした〈現象学と生の哲学の論争〉自体はけっしてハイデッガーの独創でないことはここで確認しておく必要がある。

年代からしてハイデッガーに極く近い例をあげれば、フリッツ・カウフマ

ンの『パウル・ヨルク・フォン・ヴァルテンブルクの哲学』(8)(1928年)を指摘することができる。いや、こうした論争がおこること自体じつは、ミッシュも言うように、「フッサールの現象学とデイルタイの生の哲学によって開かれた道」(9)が酷似していることもおおきく作用しているのである。なにしろデイルタイ自身も『精神科学における歴史的世界の構成』(1910)のなかでフッサールの『論理学研究』を高く評価しているのだ(10)。デイルタイは「この本を『画期的なもの』と呼び、これを自分のゼミナールで使用している」(11)のである。事実、デイルタイの「表現」という概念は、フッサールの『論理学研究』から学んだものだ、と言われている。もちろん、最終的にはデイルタイは、「厳密な学としての哲学」(1910)におけるフッサールの批判などを契機に、フッサールおよびブレンターノ学派から離れていく。

こうした背景からいえば、ミッシュのハイデッガー批判は、いわばデイルタイとフッサールとの〈因縁の対決のひとつ〉にすぎないことにもなっていく。

しかしミッシュにとっては、ハイデッガーの『存在と時間』の出現はそう簡単に解決のつく問題ではなかった。というのも、ハイデッガーはデイルタイの、「〈生を生それ自身から理解する〉という生の哲学の方法原理」(13)を真正面に立てた上で自分の現存在の分析論を遂行しているからである。しかも、その筆致は、——ミッシュの表現を借りて言えば——「立派に仕事をこなす本物の職工長」(14)のような手際だったのである。デイルタイ哲学の継承者を自認するミッシュの震撼もけた違いに大きかったに違いない。それだけに実際、ミッシュのハイデッガー批判は原理的、かつ徹底的なものとなっている。彼の言葉を引けば——、「われわれの本質的な問題は、ここ『『存在と時間』』でとられた、哲学体系の革新の道、つまり方法的なものである」(15)。

ところが、この論争は思いもよらない理由から突然終結することになる。ハイデッガー批判を纏めた『生の哲学と現象学——ハイデッガーとフッサールに対するデイルタイ学派からの論争』(1931)は、「その出版直後に国家社会主義の政権奪取によって強制的に反故にされたのである」(16)。そればか

りか、ミッシュ自身も、1935年、ゲッティンゲンの教授職を突然解かれたのである。この点から言えば、以下に述べる〈存在論と生の哲学の論争〉は実らざる論争、あるいはプラトンに模して言えば、〈書かれざる教説〉ということになる。それはあくまで、〈死んだ子の歳を数える〉ごとき論争だと考えよう。

しかしわれわれとしては、この論争から、ハイデッガーの『存在と時間』に内在する方法論そのものの問題点を抉りだしたい、と考えている。すくなくとも、ハイデッガーの哲学的影響が決定的となった現在においてはこうした作業もきわめて重要だと考えたい。しかし反面、こうした試みが極めて困難なことも自覚している。思うに、この困難は資料の問題というよりはその後の哲学史そのものに起因しているのである。というのも、ガダマーの『真理と方法』(17)が行刊され、大きな影響を与えることとなって以来、解釈学と存在論の問題は、ミッシュとハイデッガーの問題よりはむしろガダマーとハイデッガーの問題に移ったからである。新しいシーンの中でミッシュのハイデッガー批判は影を失い、忘却されてしまった観がある。私の意図としては、あえて解釈学論争の〈原点のひとつ〉を捜し求めたいと考えている。

とはいえ、ここでは主として、ゲオルク・ミッシュの著作『生の哲学と現象学——ハイデッガーとフッサールに対するディルタイ学派からの論争』に的を絞り、この著作の内容を紹介する形で〈存在論と解釈学の論争〉に光を当てたい、と考えている。

本論の構成

- 1、本書の成立事情
- 2、ハイデッガーの存在論の批判
 - a、ハイデッガーの“歪、な問題設定
 - b、実存の分析論は存在論への通路となるか
 - c、生の範疇と実存疇
- 3、存在論か、それとも生の哲学か

1、本書の成立事情

『生の哲学と現象学——ハイデッガーとフッサールに対するデイルタイ学派からの論争』は、4つの論文からなっている。まず、その4つの論文名を順次紹介することにした。

- 1、「存在」と「時間」という概念によって特色付けられた相対立する状況における、哲学的な基礎づけの問題。
- 2、生の論理学と現象学的存在論
- 3、生の範疇と実存疇との総合の問題
- 4、デイルタイとフッサールから出発する哲学運動を歴史的体系的に分析することによる客観的決断の試み

本書は基本的に論文集ということになる。しかし全体を貫くのは、はっきりとしたハイデッガーに対する批判である。これは本書の成立事情を記した次の「前書き」を読めば歴然とするはずだ。

「本論を書こうという刺激は、フッサールの古希（1929年4月）を祝おうと若き現象学徒が準備していた記念論文集に寄稿を依頼されたことによる。わたしはこの依頼にぜひとも応じる必要があると思った。この依頼に表現されているような、デイルタイ学派との共同意識について自分でもはっきりと主張したいと思ったからである。寄稿のテーマもおおのずと生まれてきた。ハイデッガーの著作『存在と時間』（1927年）についての論評。なにしろ、この書ではっきりとこの共同がうたわれているからだ。ところが、こんな臨時の仕事から長い対話が生まれて、記念論文のわくをはるかに越えてしまった。……ハイデッガーが哲学運動に介入したことによって生まれてきた状況は原理的な対決を〔わたしに〕迫ったのみならず、同時に、デイルタイの〔哲学の〕方向をもっと明瞭に打ち出す必要も高まったのである。これが可能となったのは、デイルタイ著作集の第7巻出版（1927年）〔注釈の10を参照のこと〕である。この著作によって、第5巻の予備報告において着手した叙述はさらに進展させることができるようになったのだ」（18）。

本書の執筆はもともと、この「前書き」にもあるように、フッサール古希論文集に寄稿した論文からはじまったのである。当初は、フッサールの現象学と「デイルタイ学派との共同意識」についてミッシュなりにコミットしたいというところから始まったのである。ところが、ハイデッガーとの対話は思わず長くなってしまった。「臨時の仕事」のわくをはるかに越えて、ミッシュ自身深刻な問題に直面したのである。彼は「原理的な対決」を迫られたばかりでなく、自分の所属するデイルタイ学派の方向性そのものまでも「もっと明瞭に打ち出す必要」にも迫られたのである。この点から言えば、本書は、ハイデッガー批判であるとともに、じつはデイルタイの生の哲学の自己省察という意味合いももっている。これについては、近年出版された『生の哲学に基づく論理学の構築』を参照されたい(19)。ミッシュは、1927/28年と1929/30年の両冬学期に「論理学と学問論入門」、1931/32年冬学期に「論理学と知識論入門」、1933/34年冬学期に「論理学と知識の基礎付け入門」を講義し、ハイデッガーとの積極的な対決を試みている。

われわれとしては、ハイデッガーの存在論との「対話」(ミッシュの言葉)を知るうえで重要な1と2の論文を中心においてミッシュの存在論批判を再構成してみることにしたい。

2、ハイデッガーの存在論の批判

結論的に言えば、ミッシュのハイデッガー批判は次の4点を巡っている。

- 1、まず『存在と時間』の構想は——ハイデッガーが古代存在論の再生を主張するにもかかわらず——近代的な方向性を色濃くもつ点。
- 2、宗教的—倫理的立場が混入している点。
- 3、実存の構造を取り出すことによる存在論の展開の問題点。
- 4、学的概念の形式化(ヒューム—フッサールの「認識の現象学」)に固執したため、実存的生の力動性に対する視点を失った点。

ごくおおざっぱに言えばこの4点になる。もちろん、こうしたミッシュの

批判のいくつかは現在ではすでに一般的な説となっている。そればかりでなく、『存在と時間』の構想自体が挫折した今となつてはむしろミッシユの指摘の正しいこともいくつか洞察できるはずである。

まず、ミッシユの出発点を確認したい。右の引用にあるように、デイルタイ著作集の第7巻(1927年)である。詳しくいえば、そのうちの「精神科学における歴史的世界の構成」(Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften)である。とりわけ、「生の範疇 (die Kategorien des Lebens)」が立脚点となる。その点で言えば、論争は『存在と時間』か、それとも『精神科学における歴史的世界の構成』か、もっと具体的には「実存範疇」か、それとも「生の範疇」かという問題に集約することになる。しかしまた、ハイデッガーのフライブルクか、はてまたミッシユのゲッティンゲンかの議論でもある。

a. ハイデッガーの“歪な”問題設定

第一論文の冒頭でミッシユはまずふたつの問題点を指摘する。それは、『存在と時間』がカント—フィヒテ的な、近代的な方向性を色濃くもつ点であり、また彼の分析の背後に「倫理的—理想主義的な立場」(20)が混入している点である。

まず第一の指摘であるが、ミッシユは「時間」という概念に着目する。彼によればこの概念自体、「近代的な、いわゆる生の哲学の領域中」にあると言う。すなわち彼は、デイルタイの言葉、「生においては、生の最初の範疇的規定として、何よりも根本的に時間性が保持されている」、あるいは、ジンメルという言葉、「時間は、生の陳述不可能な、ただ体験されうるしかない直接的具體性においてあるところのもの——抽象的な——意識形式である」を念頭に置くのである。こうした極めて「“近代的な”方向」(21)に立ちながら、ハイデッガーは「存在」というギリシア的な概念を導入するのである。「存在の意味への問をあらためて立てることが」大切だ、と。ハイデッガーは、「生の哲学を継承しながらも、しかも存在論を目標として立てる」

のである。近代的哲学と古代ギリシアの存在論とが彼においては並存するわけである。しかもハイデッガーは「存在」を人間の生、つまり実存であると定義する。存在はかつてギリシアにおいてもったはずの对象的な性格を失い、人間主体的な存在に置き代わるのである。このような「転倒」(Umstellung) は——ミッシュは続ける——精神的には「ギリシア人の知らない出発点であり、キリスト教の信仰によって獲得された経験の立場」(22) である。もちろんハイデッガーは、使い古された、通俗的な「生」という概念の代わりに「現存在」という言葉を導入し、「現存在の実存論的分析」を試みるが、しかしここにおいてもカントーフィヒテに由来する近代的な出発点をとりながら、パルメニデスーアリストテレスに由来する古代の哲学問題を摂取するという「パラドックスな説明」(23) はぬぐいがたい、と指摘する。

しかも、ミッシュの見るところ、ハイデッガーの実存分析には「明らかに一面的な特定の生解釈」がはいり込んでいる、と言う。言うまでもなく、ハイデッガーの意図は、「人間の実存一般の構造全体を体系的に分析する」(24) ことである。ところが、彼はこの解釈を全体として統一的に試みようとする。本来完結的な分析を試みること自体不可能な人間実存に完結的な構造分析を加えようというのだ。そのために、ハイデッガーは「倫理的—宗教的運動」を持ち出す。特定の実存様式を持ち出し、これによって実存分析の完結性を保証するのである。それが、ハイデッガーの持ち出す、「われわれを世界拘束性から自由に開放する決断」であると言う。ここには、意識の本質を指向性によって分析しようとするフッサールの「厳密な学問」の理念がはっきりと読み取れると言えよう。「ハイデッガーにおいては、人間の現存在の解釈から出発して、純粹に内在的に、世界観的な先行概念なしに、デイルタイの定式化した規則——『生を生そのものから理解する』——に従って解釈を遂行しながらも、普遍的に拘束的な、倫理的—形而上学的性格といったものが際立ってくる」(25)。悪く言えば、「彼はただ典型的なひとつの意識の立場しか定式化していないのだ」(26)。

近代的な方向、そして「倫理的-宗教的理念」——ここまでの論点はまだ
けっして本質的な議論ではない。

b. 実存の分析論は存在論への通路となるか

次にミッシュは、ハイデッガーの基礎的存在論の構想自体を批判する。いっ
たい、目標としての存在論の仕上げと、方法として実存の解釈学——このふ
たつを明確に区分し、ここからさらに存在論へと展開することなど可能なの
であるかどうか、と批判するのである。

周知のように、ハイデッガーは存在の問いの具体的展開を次のように説明
している。

「存在の問は、現存在自身に属している本質的な存在傾向、つまり前存在
論的な存在理解を徹底化すること以外のなにものでもない」(27)。

もちろんこのかぎりにおいては、ハイデッガーの基礎的存在論とデイルタ
イの生の哲学との間に「本質的な一致」(28)があることをミッシュも認め
る。ハイデッガーも、「出発点を生に取り、ここから哲学の新しい基礎付け
をもとめるのである」(29)。しかしミッシュが批判するのは、「実存の分析」
と「存在論」の仕上げとを明確に分けた点である。ハイデッガーによれば、
前者は後者に到達するための「準備的基礎分析」——手段・助走——にすぎ
ないのであって、本来の目標はあくまで存在論の概念的構築にある、とい
うのである。すなわち、ハイデッガーの「意図は生の哲学ないし哲学の人間学
ではなくて、〈基礎的存在論〉なのである」(30)。彼においては、生の解釈
は「二次的哲学 (secundae philosophiae)」にすぎず、第一次的哲学 (prima
philosophia) はあくまで「存在論」なのである。

これに対してミッシュは、存在論は解釈学が包摂するという立場を貫く。
彼によれば、存在論と解釈学の関係は絶対に目的と手段の関係になってはな
らない、というのだ。ミッシュは言う。

「哲学は、それ自体が実存的現象であるかぎりにおいては、実存論的分析
論の内部で発見されなければならないが、しかし哲学は同時に…この分析に

基づいてはじめて到達できるもの、いやこれを潜り抜けることで到達できるものとして立てられる」(31)。

哲学は生の解釈学から出発するが、しかしこれは絶対に哲学を人間学的に導出するといったことを意味するのではない。哲学もすべての人間の創造物と同様に人間の生の意味の中にあるが、しかしけっして人間の「性質」から導出されるわけではない。哲学を現存在の本質から導出することなど最初から無理なのだ。

ところが、ハイデggerは存在論を展開するための基礎的存在論を構築しようとする。もしかしたらここには、デカルトの自我とは異なるが、しかしこれに類した「哲学の絶対的な始まり (der absolute Anfang)」(32)を求めるハイデggerの意図が隠されているのではないかとミッシュは問うのである。すくなくとも、こうした基礎的構造物の構築を試みようとする事自体、ヒューム-フッサールの「認識の現象学」——厳密な学としての哲学——の影響が色濃いことはわかる。この影響に引っぱられて、「現存在の力動性を問題とする実存論的出発を行いながら、『基礎的存在論』の〔構築の〕方向に向けては根本的に静的な見方の方が強調されてくる」(33)。しかし、すべてを一元的に基礎的存在論から説明することはできるのだろうか。むしろ、人間の生きられた生を理解すること——これに徹底すべきではないだろうか——とミッシュは言うのである。つまり、「生の哲学は哲学の絶対的始原を拒否する」(34)のである。超越の内在、すなわち「超越はつねに必然的に内在と『絡み合っている』。彼岸は人間の生の内的彼岸性に還元され、この彼岸性はさらに…人間によって獲得されたものなのである」(35)。ミッシュはデルタイの言葉をひく。

「ひとは生から出発しなければならない。これは [しかし]、ひとはこれを分析しなければならないというわけではない。むしろ、ひとは生をその形式のままに生きなお (nachleben) さなければならないし、ここにある結論を引き出さなければならないことを言うのである。哲学とは、生を意識にもたらし、これを徹底的に思惟する活動である。」(36)。

しかしハイデッガーは、生を分析し、その構造を取り出す。しかもこの構造を「概念によって形式化する」(die begriffliche Formalisierung des Lebenszusammenhanges) (37) のである。ハイデッガーにはすべてを概念に置き換えていくという「徹底主義」(Radikalismus, 38) が潜んでいる。ミッシュは言う。

「われわれが見るに、[概念による] 形式化は…生の解釈の場合は無意味である。すくなくとも、それが諸現象を見させる手段としてでなく、諸現象を体系的に組み込んで、現存在全体を包括するひとつの形式構造を作り出そうとするかぎりでは。こんなことでは根本において、(ハイデッガーの) 〈構造〉 概念が獲得したものは無力化されてしまう。」(39)

これに対して、ディルタイのとり立場は、「抽象的なものはすべて生的なものに関係する中で立ち現われるのであって、けっしてひとりで立ち現われるわけではない」(40) である。「生は生そのものから理解する」(41)、「生が生を把握する」(42) ——これがディルタイの立場である。こうした生にハイデッガーのような概念的形式化など持ち出したら、「生の力動性に対するまなざし」(43) は一挙にその力を失うことになる。

ところがハイデッガーは、こうした生に概念の暴力を施そうとして、「倫理的ー理想主義的な立場」(44) を持ち出す。これをミッシュは「哲学的ヒロイズム」(Heroismus) と呼ぶ。「ヨルク伯の精神から何かヒロイズムのようなものを読み取り、これをディルタイの作品に挿入しようとする」のだ(45)。この精神によって、生の根本範疇の析出も正当化される、と。その結果、ハイデッガーにおいては、『存在と時間』後半に見るように「世界との結び付き」は徹底的に排除されることになる。

C. 生の範疇と実存疇

ここで問題となるのは、ディルタイの「生の範疇」である。ディルタイはこれを、「生そのものに固有な連関のあり方」(46) であると定義する。それは、「すべての生の連関の理解が完遂される普遍的な把握形式、つまり〈生

把握の道具〉であるのみならず、〈時間の流れにある生そのものの構造形式がそこにおいて表現される〉のである」(47)。もちろんこのかぎりにおいては、ミッシュも認める通り、ハイデッガーの実存疇とも重なってくる。すなわち、「方法の原理という点では、われわれは現存在の実存論的分析論が生の哲学と一致していると思う」。しかしデイルタイは、「歴史的分析和超越論的研究を結び付ける方法」に向かう(48)。「生の背後にさかのぼることはできない」(49)、あるいは「生の哲学は、〈絶対的な点〉を拒否する」(50)という立場を貫くのである。簡単に言えば、生を生そのものから理解するためには、この生を育んだ社会や歴史の連関の方に思いを広げていくのである。別の言い方をすれば、デイルタイの「理解はそれ自体、表現作用そのものを逆にたどる操作」(51)にはかならない。そのかぎりでは、デイルタイの分析においては、「詩学から現存在の解釈学へ、意味の美的範疇から生の根本範疇として現存在の解釈学へと向かうデイルタイの道程は相対的に偶然であり、個人的な制約を受ける」(52)ことになる。ミッシュはこれをはっきりと、「デイルタイ解釈学の基本原則は、〈人間の自己省察が基準であり、基盤である〉ということだ」(53)とまで言い切っている。ところが、これに対して、ハイデッガーのとる道は、指向性によって意識の本質を規定しようとしたフッサールの現象学の方法である。その結果彼は、生の事実性から出発しながらも、生の、つまり実存の、概念的学的構造——静的な——分析に終止することになる。

ハイデッガーは『存在と時間』において生の哲学の真正な継承者を自認し、デイルタイ解釈の方向性までも提案する。なにしろ、『存在と時間』の構想自体、デイルタイ—ヨルク伯の理念の継承なのである。ところが、ミッシュの批判するところでは、ハイデッガーに色濃く残るのは、フッサールの学の理念であり、これを完遂するために持ち出された宗教的倫理的な立場である。すくなくとも、デイルタイの提案した、生の哲学の原理——「生を生そのものから理解する」——は根本から無視されているのである。そこから、ミッシュは次のように結論する。

「パラドックスに思えるが、ハイデッガーは、生の連関を概念によって形式化しようと力づくでおしすすめ、実存論的分析論はデイルタイの意図を哲学的に徹底化したように見えるが、しかしまさしくキリスト教の〈世界観的〉内実、つまり倫理的二元論を伴わせてしまう。これに対して、内容と形式をぜったいに切り離さないデイルタイのほうは、キリスト教的な経験から新しい、フィヒテの構想した生の知の根本形式を解き放つのである」(54)。

3、存在論か、それとも生の哲学か

すでに述べたように、ここに論じた〈存在論と解釈学の論争〉自体、ほとんど実りを結ばないままに終わったのである。外的な理由から、論争自体突然終結したのだ。

しかしハイデッガーの『存在と時間』を読めば歴然であるように、彼のデイルタイ学派に対する批判は重要な問題をはらんでいる。これに対して、デイルタイ学派の重鎮・ミッシュのハイデッガー批判もきわめて真摯なものである。ミッシュは詳細にハイデッガーの矛盾を衝き、彼の「存在論への傾向」を攻撃する。現存在の解釈学を助走にして、ここから存在論へと向かうことは不可能であると語り、また、現存在の解釈学を、つまり基礎的存在論を完結した形で展開すること自体無理がある、と論じる。

周知のように、『存在と時間』の後半部分は挫折している。すくなくとも、その後出版された著作を読むかぎり、その原因として基礎的存在論の構想自体の挫折はあきらかである。さらに、ブリタニカ草稿をめぐって繰り広げられたフッサールとの論争から、ハイデッガーにはフッサールの現象学的分析の限界も明かになっている。とすれば、この点にかんするかぎり、ミッシュの批判は正鵠を得ていたと言うことができよう。

しかしその後のハイデッガーはこうした生の哲学という立脚地を放棄して、存在そのものを問うようになっていく。ミッシュが批判したのとはまったく別の姿勢を貫くのである。『哲学への寄与』などはこうした傾向を色濃く示している。しかし、生の立場、ハイデッガー的に言えば、実存の立場を無視

して「存在の問い」を展開することにいったいどんな意味があるのだろうか。そもそもどんな根拠からそうした試みが正当化されるのだろうか。

すでに述べたように、ミッシュはハイデッガーを「ヒロイズム」と揶揄している。これは、ミッシュによれば、倫理的二元論を導入する立場でもある。ハイデッガーは本来性と非本来性の区別を立てるが、ヨルク伯はキリスト教（とりわけ、プロテスタント）的な立場を立てる。これを出発点にして、論述の基礎付けを試みるのだ。はたして、いわゆる後期ハイデッガーにこうした「ヒロイズム」がないかどうか、興味深いところでもある。

もちろん、安易にこうした議論を展開すべきではないだろう。ここでは、主としてミッシュのハイデッガー批判を中心に論じてきたが、残る問題としては、ハイデッガーにおけるディルタイ解釈の問題や、はてまたミッシュの講義録におけるハイデッガーの問題、さらにはディルタイ自身の解釈学をも探り出す必要がある。この点はまた、追って紹介したい。

[本論は、1996年6月29日土曜日に東洋大学で開催されたハイデッガー研究会において発表したものである。本論について当日の研究会出席者から貴重な指摘も多々あったが、ここでは——注釈と表現のいくつかを除いて——基本的論旨は発表当日そのままの形で掲載している。

発表後、わたしと同じような視点からハイデッガーとミッシュとの論争を論じた論文Elzbieta Paczkowska-Lagowska, *Ontologie oder Hermeneutik? Georg Mischs Vermittlungsversuch in der Auseinandersetzung zwischen Heidegger und Dilthey (Zur philosophischen Aktualität Heideggers. Im Gespräch der Zeit, Frankfurt am Main, 1990, S. 189-197)* を見いだした。この論文の視点、さらに出席者の批判や指摘を含めた論文についてはあらためて別の機会に書くことにしたい。]

注釈

1. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen, 1927, 1966. S. 46. 以下、

引用にあたってはSZ. と省略する。

2. 詳細は『存在と時間』46頁を参照のこと。この問題については、拙論「ハイデッガーとフリッツ・カウフマンにおけるヨルク伯の意味」(「デイルタイ研究8」18-31頁所収、日本デイルタイ協会、1996年)において特にヨルク伯解釈の視点からハイデッガーとフリッツ・カウフマンのデイルタイ解釈について論じている。この論文も参照のこと。

3. SZ. S. 377.

4. SZ. S. 404.

5. Georg Misch, *Lebensphilosophie und Phänomenologie. Eine Auseinandersetzung der Diltheyschen Richtung mit Heidegger und Husserl*, 1931, 1975, S. 1. 以下、本書からの引用はすべてLP. と省略する。

6. LP. S. 2.

7. LP. III.

8. Fritz Kaufmann, *Die Philosophie des Grafen Paul Yorck von Wartenburg 1877-1897*, Verlag Max Niemezer, Halle, 1923.

9. LP. 20.

10. Wilhelm Dilthey, *Studien zur Grundlegung der Geisteswissenschaften*, (in : *Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften VII*), Göttingen, 1926, 1973 , S. 14.

11. Frithjof Rodi, *Hermeneutische Logik im Umfeld der Phänomenologie* : Georg Misch, Hans Lipps und Gustav Spet, (in: *Erkenntnis des Erkannten, Zur Hermeneutik des 19. und 20. Jahrhunderts*, Suhrkamp, 1990) S. 147.

12. 詳しくは、『構成』237頁を参照のこと。

13. PL. S. 20.

14. PL. S. 2.

15. PL. S. 2.

16. PL. S. 325.

17. Hans-Georg Gadamer, Wahrheit und Methode, 1960, 1975.
18. PL. S. III.
19. Georg Misch, Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lebens. Göttinger Vorlesungen über Logik und Einleitung in die Theorie des Wissens, Herausgegeben von Gudrun Kühne-Bertram und Frithjof Rodi, München, 1994.
20. LP. S. 58.
21. LP. S. 4.
22. LP. S. 4.
23. LP. S. 6.
24. LP. S. 7.
25. LP. S. 7.
26. LP. S. 58.
27. S2. S. 15.
28. LP. S. 28.
29. LP. S. 13.
30. LP. S. 7.
31. LP. S. 17.
32. LP. S. 25.
33. LP. S. 16.
34. LP. S. 25.
35. LP. S. 26.
36. Wilhelm Dilthey, (in: Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften V) L VIII, Göttingen, S. 27.
37. LP. S. 87.
38. LP. S. 62.
39. LP. S. 62.
40. LP. S. 29. (Schleiermachers Werke, 3. Abt. IX, 422f.)

41. LP. S. 20.
42. LP. S. 23.
43. LP. S. 63.
44. LP. S. 62.
45. LP. S. 57.
46. 詳しくは、Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften VII., S. 235.
47. LP. S. 55.
48. LP. S. 68.
49. LP. S. 73.
50. LP. S. 73.
51. LP. S. 55.
52. LP. S. 77.
53. LP. S. 80.
54. LP. S. 87.